

海嘯の害から命を護る

「忘れた頃やって来る天災」の代表的なものが津波であろう。巨大津波は、数世代の間隔をおいて発生する。1992年にニカラグアやインドネシアで生じた津波は、まったく予備知識のない住民を突如襲った、正に不慮の災難であった。

知っているか否か、正確に認識するか否かが運命を分ける。明治三陸大津波は、1896年旧暦端午の節句の夜8時ごろ、三陸沿岸を襲った。最大打ち上げ高は30mを越えた。この100年ほどの間では、1883年にインドネシア・クラカタア火山の爆発による津波が36,000人の命を奪っているが、これに次ぐ悲慘事となった。

明治の津波で死者が多かった最大の原因は、避難する人がほとんどいなかった事である。流された家一軒につき7人程度の死者行方不明者という比例関係が、どの集落でも成り立っている。地震の最大震度が3と弱かったため、津波への警戒を怠ったからである。巨大津波来襲直前には、津波が崖に激突し、あるいは捲れ上がった津波が激しく砕け落ち、異常な音響が発生する。この時も、同様な音響を聞いた人が多い。しかし、日清戦争戦勝祝賀会の花火の音と間違え、避難には結びつかなかった。ある在郷軍人は、この音響を敵艦が来襲して砲撃していると勘違いし、武装して浜に突進して津波に巻き込まれた。

1983年の日本海中部地震津波では、加茂青砂の浜で、山村からきた小学生の一団が津波の犠牲となった。引率の教師が地震を知りながら避難させなかったとして、裁判沙汰になった。同じ時、秋田港の近くでは、高校生の一団が教師の判断で高台へと避難している。日本海側では、ごく稀にしか津波が発生しないため、地震と津波とが結びつかなかったと言われた。しかし、逆の事例もある。昭和初めの男鹿地震で50cmぐらいの津波を見た人が、今度も面白かろうと浜に行き、大津波にさら

われて危うく死ぬところだった。

津波には、一つ一つ個性がある。同じ津波でも場所によっては違う現れ方をする。生半の知識で都合の良いように判断しては一命に関わる。

1933年桃の節句の早朝、激しい地震の後で大津波が三陸地方を襲った。「冬には津波は起こらない」「明治の津波は地震後25分で来た。もう25分たったから津波は来ない」「今度は地震が大きかったから、津波は来ない」など、自前の判断に基づいて、あるいは避難せず、あるいは避難先から家に戻り、被災している。宮城県の一地方では、明治三陸大津波の翌年、震度4以上の地震があり、しかも津波が発生しなかったので、「大地震では津波は発生しない。地震が小さいと津波が大きくなる」との経験則が成立していたのである。

この時の反省は、三陸沿岸での津波記念碑に表れた。「地震があれば津波の用心」と刻み込まれ、集落の中心部に立てられたのである。

ところが、地震がなくともチリ津波はやってきた。いま、観光地宮古市浄土ヶ浜の北端には、相矛盾する言葉を記した記念碑が並んでいる。

チリ津波後、近代的な津波対策は急速に進み、高さ5～6mの防潮堤が建設された。完成から間もない1968年、十勝沖で発生した津波が、三陸地方を襲った。たまたま中規模の津波であったため防潮堤が完全に効果を発揮した。その後、巨大津波を経験していない人の間に「津波は構造物で防げるもの」という考えが広まった。昔を振り返ると大きな津波が見つかる。慶長(1611年)の津波、貞観(869年)の津波は、想像出来ないほど大きかったはずである。

長いとも、3時間程度の辛抱である。津波の恐れがある時には、20m以上の高台に必ず避難するに越した事はない。

(東北大学工学部教授：首藤伸夫)



海嘯の害

